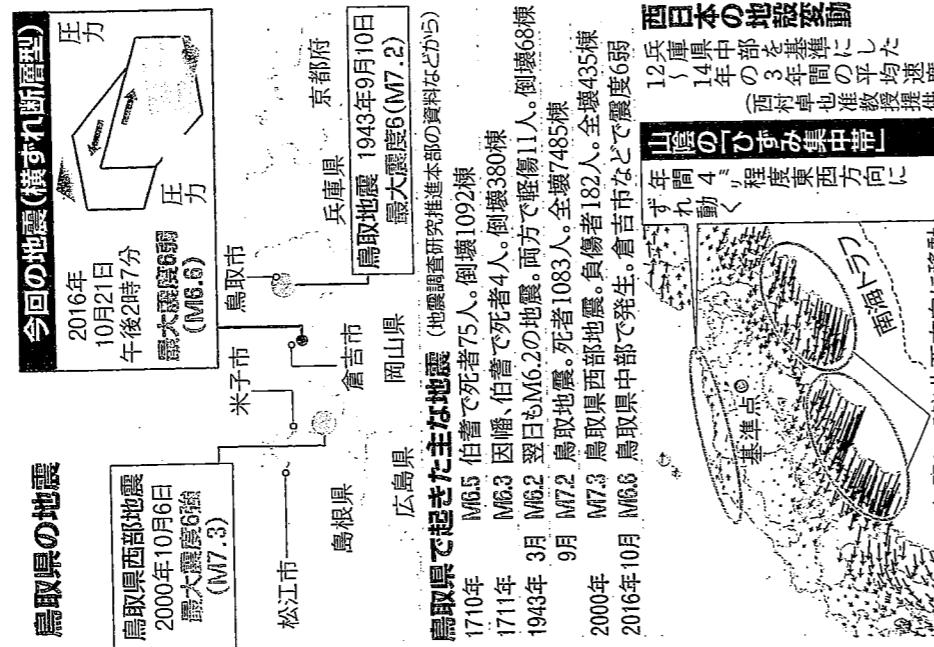


中華書局影印
新編
卷之三

第三種郵便物認可



本筋道なし 真光にわMG羅

21日午後に最大震度6弱の地震が起きた鳥取県は、これまでも大きな地震が繰り返し起きてきた地域だ。震源付近に活断層は確認されていないのに、なぜ、起きたのか。

「今回のような地震は活断層がなく所でも起きる」。気象庁では午後3時40分から菅木元・地震波監視課長が記者会見した。震源付近で明確な活断層が確認されていないにもかかわらず、地下の浅い場所が押し合って起きる「横ずれ断層型」であることを明らかにした。

気象庁によると、今回の地震の震源のそばで約2時間前にもマグニチュード(M)4・2の地震が起きたが、付近ではM4クラスの地震が繰り返し起きてお

り、前震かどうかを区別するのは難しことくな。

鳥取附近は中国地方で、地震活動が活発な地域であり、これまでに震源調査研究推進本部は今月7月、鳥取県や島根県東部を含む中国地方北部で今後30年以内にM6・8以上の地震が起こる確率を40%と発表。瀬戸内海側は2~3%、山口県側は14~20%である。

鳥取では過去にも大地震が起きてきた。1943にはM6級の地震があり、前震かどうかを区別するのは難しことくな。

きた半年後、鳥取地震（M7・2）が発生して千人あまりが死亡。2000年に鳥取県西部地震（M7・3）が発生した。クラスの地震が起きておらず、ひずみがたまつて感じられる」と指摘する遠田晋次・東北大教（地震地質学）も「山陰

3) が発生した。

なぜ地震が多いのか。紀伊半島から四国沖の南海トラフ周辺では、陸側のプレートの下にフリッピン海プレートが沈み込み、プレート同士が押し合っている。

西村卓也・京都大防災研究所准教授(地震学)によるところ、山陰地方の日本海側は、瀬戸内海側より年3~4回、東にずれ動いており、ひずみが集中しやすい地域がある。西村さんは「鳥取は地盤が比較的軟らかくひずみがたまりやすい。今回の震源付近は、数百年はM7

(地震地質学)も「今地方は常に地殻がひずんでいる。地震がよく起きる域が日本海側の内陸に帶に広がっている」と話す。南海トラフ地震との関連を指摘する見方もある。

田康弘・京都大名誉教授(地震学)は「フリッピン海プレートの陸側への沈み込みに伴い、巨大地震が生ずる50年くらい前から

長岡川

今回の地震では、高

西南日本では内陸地震が活発化してくることが、過去の事例からも分かつていい。阪神淡路大震災を皮切りに西南日本は活動期に入っていると考えられ、熊本地震も今回の地震もその一つにいえる」とみる。

離れた大阪府南部と徳島県北部で階級2を観測。長野県中部、愛知県西部、高知県東部など8地域で階級1を観測した。

福柳伸夫・名古屋大学減災連携研究センター長（地震工学）によると、軟らかい堆積層に厚く覆われている平野や盆地では揺れが増す。

地震動近畿でも

長周期地震動 近畿でも

今回の地震では、高層ビルなどをゆっくりと長時間揺らす長周期地震動が大きい範囲で発生した。大阪市では地震直後、高さ300mあるあべのハルカス、大阪府吹田市立美術館、梅田スカイビルなどの高層ビルで相次いでエレベーターが停止した。安全装置が働き、近くの階で停止するなどしたため、閉じ込められた人はいなかつたといふ。長周期地震動の大きさは階級1（室内にいたほとんどどの人が揺れを感じる）、階級4（はなに行動どころができない）の4段階である。気象庁によると、兵庫県北部、鳥取県西部のはか、震源から150km近くに堆積層に厚く覆われてゐる平野や盆地では揺れが増幅され、長周期地震動が起きやすい。大阪や徳島を中心とした地盤で、鳥取県西部でも長周期地震動を測っていた。

— 2 —